

●大賞

「風船」

麻生 榮子（神奈川県伊勢原市）

野仕事の数多や楽しあたたかし

どの坂を急ぐも我が家花吹雪

働く人遊べる人に梨の花

骨折損のこれも楽しや万愚節

山越えて来し風船よ絆生む

走り茶や古い手紙を読み返す

芝桜植え足す長き丈口に

おみなとは死ぬまでおしゃれ更衣

花蜜柑ひそかに日暮来ていたり

坊ちゃん南瓜植えてうきうき朝の雨

曼荼羅の一絵のさまに鳥帰る

生真面目に育てたつもり曲り瓜

丁寧に鍬研ぐ夕べ時鳥

亡き娘にも来る誕生日鹿の子百合

新涼や命いちにちずつ使う

わが朱夏の一句は夢の中に消ゆ

揚げて煮て漬けて上々名残茄子

余生とは付録の如し薄紅葉

白菜の巻くは一途の底力

よく切れる鍬に勤労感謝の日

●準賞

「雪と花々」

藤川かね子（神奈川県伊勢原市）

知らぬ間に大雪となる夜の静寂

わが狭庭名園と化す雪化粧

窓明り雪あかり又見に立ちぬ

どか雪を見ていて術のなかりけり

雪めずらしひと日二た日は楽しみて

旬日をあわれ泥雪積まれいて

朝日さし刃もの光りのしずり雪

雪どけの容ちやさしく日だまりに

解け残る石灯笼の雪帽子

雪消えてあっけらかんと庭残る

山あいの空の透明初ざくら

人を恋い人を悼みぬ沙羅の花

藍ふかき露をとどめし螢草

雲の影山へ移りぬ朴の花

暮れ六つの鐘の明るし凌霄花

穏やかに歳重ねたし花棟

寺町をめぐるさきざき曼珠沙華

高原の風吹き返す女郎花

右往左往台風余波の秋桜

七島の名を聞く石踏の花日和

● 準賞

「夕かなかな」

津川 昇子（神奈川県伊勢原市）

碧天の湧きたつひかり辛夷の芽
たましひを繕ふ遠き山桜
句帳手に木椅子の湿り下萌ゆる
初蝶のかがやきはじめ水の面
真っ青な木賊まばらに風光る
手に受けてさみどり弾む露の臺
雪割れて嶺のかがやき濃山吹
ゆりの木の高きは神へ捧ぐ花
山繭の夢幻のみどり観世音
声にせぬ想ひを紡ぐ螢の夜
晩涼の幹の打ち合ふ竹の中
落日の山を近づけ夕かなかな
一福の松虫草の径を縫ひ
胸深くことばの育つ翺雲
最果ての花野は天へ続きをり
失ひしものみな透きぬ実むらさき
寺の磴踏み減り遠嶺澄む日なり
身一つに秋思ただよふ捨て小舟
笑みと云ふ会釈全し柚子熟るる
ビバルデイの四季より今朝の冬に入る

●準賞

「寒牡丹」

藤川 公子（神奈川県伊勢原市）

より添いて子等の幸せ福寿草

野の香り一椀にあり七日粥

声はずませ語る未来や百千鳥

植田はや風をとらえてそよぎけり

幼木も大樹も眩し風若葉

雛壇にこの世の明かり灯しけり

年重ねしずかな暮し額の花

海の色ほどよく残し焼く秋刀魚

陽と風を集め自慢の吊し柿

突らざる恋もあります曼珠沙華

一人座す漢の背の秋思かな

青空へ稲の香を吐くコンバイン

現し世へ迷子のように返り花

高嶺より花野へ誘う風のあり

空蟬の葉裏に刻の止まりけり

まっさらな翳雲見ゆ初デート

読みふける奥の細道秋灯下

ねむる子の涙のあとや薄紅葉

少女等の寒さ知らずの長き脚

陽のぬくみ菰に集めて寒牡丹

2015「第1回宝井其角俳句大会」

「フリー投句部門」入選作品12句

独楽芸の独楽より舌の回りけり

稲谷 有記（兵庫県淡路市）

蟻穴を出でて真向かふ浅間山

矢崎 硯水（長野県諏訪市）

大島も江の島も見え秋澄めり

小助川雅人（鎌倉市材木座）

からすうりケーブルカーはつるべ式

木村 珠江（横須賀市岩戸）

秋深み成婚告げる阿夫利かな

加藤 敬子（横浜市泉区）

鮫鱈は日差しに瞳澱ませり

冬野 梶（新潟県新潟市）

生命線深めし仁王冬木立

高橋 徳枝（伊勢原市桜台）

さみしさをぽんとひとりの紙風船

石川 桃瑠（平塚市東真土）

学校のともだちいいなおにやんま

前田 真熙（小学三年生）

もみじちるお寺のかいだん真っ赤か

藤川瀬里花（小学三年生）

どんどやきかみさま天に送るんだ

高芝 聡太（小学三年生）

お母さんとおでかけ大すき冬いちご

高橋 俐乃（小学二年生）